

平沼騏一郎内閣運動と海軍

——1930年代における政治的統合の模索と統帥権の強化——

手嶋 泰伸

本稿は、主に斎藤実内閣期の平沼騏一郎内閣運動と海軍の関係に着目し、平沼周辺の政権構想が海軍に与えた影響と、それによって変化した海軍が平沼内閣運動に与えた影響を明らかにすることで、当該問題を1930年代以降の統帥権強化の過程の中に位置付けている。

平沼周辺では分立的統治構造を克服するため、特に軍部を統制するために、派閥の領袖を自勢力に取り込んでいた。加えて、軍部を統制するために、皇族の権威を利用しようとしていた。このように、平沼派の軍部統御策とは、機構の改変ではなく、人的な側面に依存するものであった。それによって、海軍では軍令部長に伏見宮博恭が就いたものの、加藤寛治を中心とした艦隊派は、人的側面を重視した平沼派と連携することにより、軍令部の権限を拡大するといった、制度面の改革までをも進めた。しかし、管掌領域の拡大に伴う軍令部の政治化と、皇族の政治利用を海軍内部で問題視されたことで、艦隊派首脳は海軍内部での求心力を失った。平沼の軍部統制策が、派閥の領袖を自勢力に取り込むことで達成しようとするものであったため、艦隊派首脳の没落は平沼の諸勢力の統合者としての性格そのものの崩壊を意味していた。

つまり、平沼内閣運動と海軍における統帥権の強化は、相互に影響を及ぼしながら展開していた。皇族の権威を利用しようとしたことにより海軍内部での艦隊派首脳の求心力が低下し、平沼内閣運動が崩壊したことは、人的なネットワークと皇族の権威というものに依存する平沼の分立的統治機構克服の試みが、まさにそれらを要因として失敗したということを示している。そして、人的な力量とつながりに依存する平沼内閣運動から艦隊派首脳が脱落し、運動そのものが崩壊した後には、彼らによって強化された軍令部権限という、統帥権の独立の問題だけが残るのであった。